《第１分科会》基礎・基本と評価を重視した学習

学ぶ楽しさを実感しながら基礎的・基本的な知識や技能を身に付ける家庭科学習をめざして
～第５学年「さいほう用具を使おう」の実践～

宇部市立船木小学校　間　恵　和　美

１　はじめに

今日、私たちは科学技術の進展に伴い、物質的に豊かな生活を手に入れてきた。しかし、効率と便利さを追求する中で、子どもたちに体験不足や生活感の乏しさをもたらしてしまったことは否めない。そこで、子どもたちに家庭科学習を通して、豊かで充実した生活の基盤となる基礎的な知識や技能をしっかりと身に付けさせることが重要になってくる。

基礎的な知識や技能は、繰り返し学習する中で定着する。しかし、同じような練習を繰り返すだけでは、子どもたちのやる気を高めるのは難しい。そこで、子どもたちの「楽しい」、「できるようになりたい」という願いを大切にし、作る喜びを味わいながら学習を進めていく題材の工夫が必要である。また、学習を展開する際、自己評価や相互評価を工夫し、互いに学び合う場を設定することによって、共に学ぶ楽しさを実感しながら、基礎的・基本的な知識や技能を身に付けられるようにすることが大切である。そこで、これらの視点から本研究実践を深め、得られた知識や技能を日常生活で活用できることをめざしていきたい。

２　研究の概要

(1)　製作に関する基礎・基本について

学習指導要領において、内容(3)「生活に役立つ物を製作して活用できるようにする。」と示されている。つまり、生活に役立つ物を布を用いて製作することを通して、縫うなどの基礎的・基本的な知識や技能を身に付け、生活で活用することができるようにすることをねらいとしている。

技能は、その方法だけを取り出して教え込んでも、それを次に発展させたり、生活に生かしたりするような応用力のある技能とはなりにくい。自分の生活を見つめ、課題意識をもって、学習過程の中で楽しみながら繰り返し練習していくことにより、確実に身に付けていくものと考えられる。

〔製作における基礎・基本〕

関心・意欲・態度	創　意　工　夫
・製作を通して、衣生活に関心をもつ ・製作に関心をもち、意欲的に取り組む ・作る楽しさや達成感を味わう ・製作した物や身に付けた技能を活用する喜びを味わう ・製作物を活用することにより、製作計画や方法等を見直し、次の製作に生かそうとする ・製作手順や製作時間の見通しをもち、製作計画を立てる ・目的に合わせて大きさや形を工夫する ・目的に合わせて布や縫い方を工夫する	・目的に合わせて材料や用具等を準備できる ・布を裁つことができる ・手縫いができる ・ミシンで直線縫いができる ・製作に必要な用具を安全に適切に使うことができる ・布の特性を知る ・製作に必要な材料や用具がわかる ・ゆるみや縫い代の必要性がわかる ・縫う箇所に応じた適切な縫い方がわかる ・作り上げる過程や必要な作業順序がわかる ・手縫いやミシン縫いのよさがわかる

水野香代子・橋本都　編著「小学校家庭科　基礎・基本と学習指導の実際」東洋館出版社より抜粋

(2) 製作における基礎・基本を確実に身に付けていくために

子どもたちの針を使う生活経験は少なく、技能面での個人差は大きい。しかし、子どもたちの「いろいろな物を作ってみたい」という製作に対する関心や意欲はとても高い。そこで、子ども一人一人が自分の課題をもち、主体的に取り組み、楽しさや成就感や使う喜びを味わう中で基礎的・基本的な知識や技能を身に付け活用していくためには、以下の３つの視点から、題材構成の工夫、個に応じた支援と評価の工夫が大切である。

① 題材を通して身に付けさせたい基礎・基本を明確にする
② 基礎・基本を繰り返し指導する
③ 個に応じた指導を充実する

3 研究の実際

(1) 作る楽しさを味わう題材構成の工夫

子どもたちの「作りたい」という願いを大切にしながら、基礎的・基本的な知識や技能を定着させるために、題材構成を工夫した。製作においては、２年間にわたり、発展的に学習を進めていけるように、内容の系統性に配慮して題材を選んだ。小さい物から大きい物へ、平面から立体へ、簡単な手縫いからミシン縫いへ、自分が使う物から家族が使う物へというように、基礎的なものから応用的なものへ、簡単なものから難しいものへ、要素的なものから複合的なものへとしだいに発展するように題材を配列し、繰り返し学習ができるようにした。

また、裁縫用具を初めて使う子どもたちにとっては、針に糸を通すことさえ苦労し、難しいと感じたり、うまくできなくて嫌になったりすることも多いので、簡単に作れる小物の製作を繰り返し行うことで、作る楽しさやできた喜びを味わいながら技能を習得できるようにした。

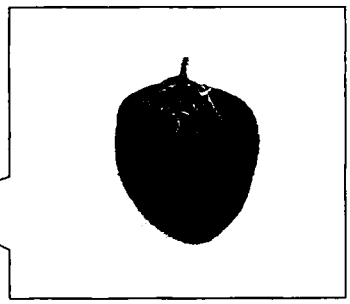
① 2年間を見通した衣生活にかかわる題材計画

学年	題材名	学習指導要領の内容	縫い方	基礎・基本	作品
5学年	できる仕事をふやそう（18） ・さいほう用具を使おう⑫	(2)衣類への関心 (3)生活に役立つ物の製作	手縫い	裁縫用具の使い方 針に糸を通す ボタン付け 玉結び・玉どめ 縫いとり なみ縫い	不織布を活用した小物 ・ワッペン ・小物 さらしを活用した袋 ・巾着袋
	ぬって！使って！楽しい生活（11） ・つくり方を調べよう⑥ ・楽しく作ってたくさん使おう⑤	(3)生活に役立つ物の製作 (7)物や金銭の使い方と買い方	ミシン縫い	布の選び方 布の性質 布の方向とみみ ミシンの使い方 しるし付け（縫い代） まち針のうち方 返し縫い アイロンの使い方	不織布を活用したランチョンマット エプロン
	夏休みチャレンジ「ぞうきんを作ろう１～手縫いで～」 冬休みチャレンジ「ぞうきんを作ろう２～ミシン縫いで～」				
6学年	つくろう！さわやか生活（12） ・衣服の着方を考えよう① ・衣服の手入れをしよう③ ・生活に役立つ物を作ろう⑧	(2)衣類への関心 (3)生活に役立つ物の製作 (1)家庭生活と家族	目的に応じた縫い方	型紙作り しるし付け 布の裁ち方 縫い始めと縫い終わり 出し入れ口とひも付け	ナップザック ペットボトル入れ エコバッグなど
	伝えよう！ありがとうの気持ち（8） ・わたしの気持ちを伝えよう④	(1)家庭生活と家族 (3)生活に役立つ物の製作	目的に応じた縫い方	これまでの知識や技能を使う	オリジナル製作 ・クッション ・ウォールポケット ・ティシュカバーなど

② 「さいほう用具を使おう」（全12時間の題材構成）

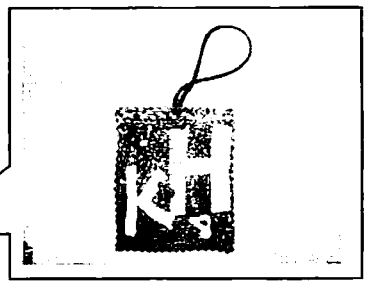
針と糸と仲良くなろう（２時間）

・さいほう用具の名前と使い方を知ろう。
・針に糸を通そう。
・玉結び、玉どめをやってみよう。
・いちごワッペンを作ろう。・・・・・・（製作１）



ぬってみよう（２時間）

・自分の名前をぬおう。（ぬいとり）
・なみぬいをしよう。
・ボタンをつけよう。



オリジナルワッペンを作ろう（２時間）

・ワッペンのデザインを考えよう。
・ぬい方を考えてぬおう。・・・・・・・（製作２）

オリジナルきんちゃく袋を作ろう（５時間）

・きんちゃく袋のデザインを考えよう。
・なみぬいでもようをぬおう。・・・・・（製作３）
・わきとひも通し口を丈夫にぬおう。

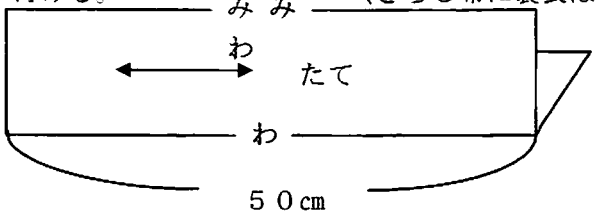
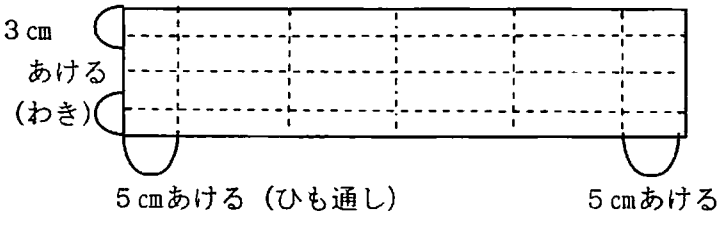
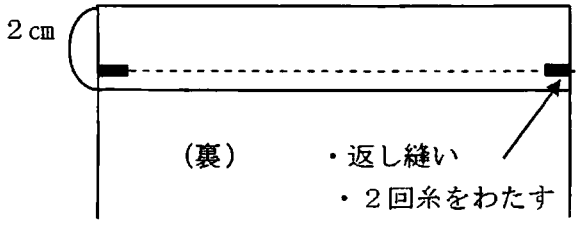
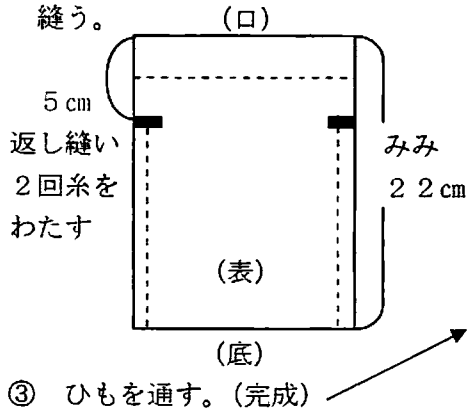
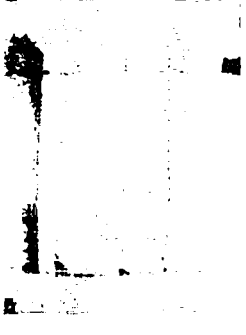
オリジナルきんちゃく袋発表会をしよう（１時間）

・作った袋を友達に紹介しよう。

③ なみ縫い練習を活用した「オリジナルきんちゃく袋」の作り方

○ 準備する物
・ さらし布５０cm、ボタン付け用の糸、ひも１ｍ、飾り用ボタン

○ 作品の特徴
・ さらし布を二つ折りにして使用するので、縫いやすく、なみ縫いの練習に適している。また、両脇が「わ」と「みみ」なので、布の端の始末をしなくてもよい。
・ いろいろな色の糸を使ってなみ縫いをし、それが模様になるので、楽しみながら意欲的に練習ができる。
・ 能力に応じて模様を作るので、早くできる子どもと遅い子どもの時間差が調整できる。
・ なみ縫い練習のために線を引いても、袋にしたとき内側になるので見えない。
・ ボタンを飾りに使うので、ボタン付けの練習も兼ねられる。
・ 「わ」と「みみ」を利用するので、袋を作るとき、ひっくり返さなくてもよい。

きんちゃく袋の作り方	製作にかかわる主な学習内容
（1） さらし布をたてに二つ折りにし、チャコペンでしるしを付ける。（さらし布に裏表はない）  	○ 布の名称 耳、わ、わき ○ ものさしの使い方 ○ チャコペンを使ったしるしの付け方
（2） 色糸を使ってなみ縫い練習をする。 始めと終わりは、返し縫いをする。 （なみ縫いが模様になる）  	○ 玉結び・玉どめの仕方 ○ なみ縫いの仕方 ○ 返し縫いの仕方
（3） ボタン付けの練習をする。	○ ボタン付けの仕方
（4） 袋を作る。 ① 口の部分を三つ折りにしてなみ縫いをする。（ひも通し） 縫い始めと縫い終わりは返し縫いにする。  	○ 待ち針の使い方 布のすくい方，方向 ○ ひも通し部分の縫い方 返し縫い、２回糸をわたす
② 裏を内側にして半分に折り、上から５cmあけて、両脇を縫う。  ③ ひもを通す。（完成） 	○ ひもの通し方・結び方

⑵ 一人一人を伸ばす個に応じた支援と評価の工夫

初めて針と糸をさわる子どもにとって、針に糸を通すだけでも大変な作業である。どうしてもうまくいかない子どもは、縫うことに消極的になり、次への意欲を失うことにもなりかねない。その子どもの姿をそのまま受け止め、学習への取組みや心情面を細かく見て肯定的に支援していくことが必要である。

① スクールボランティアによる支援

保護者による学習支援（スクールボランティア）を活用し、毎時間３～５人の保護者の方に授業に参加していただいた。うまくできない子どもへ即座に対応してくださり、子どもたちも安心して学習に取り組むことができた。そして何より、子どもたちに温かい励ましや賞賛の言葉をかけていただくことで、子どもたちが自信をもち、次の学習への意欲付けにつながった。

《子どもたちの感想から》

○　玉どめをするのがすごくむずかしかった。でも、○○さんに教えてもらってうまくできるようになりました！

○　なみぬいのとき、「ぬい目が大きすぎるとひっかかるから、小さくぬった方がいいよ。」と教えてもらったので、２本目は５ミリくらいに、３本目はなんと３ミリくらいにぬいました。「すごいね！」とほめてもらってうれしかったです。

② 個に応じた支援と評価の工夫

個人差に応じたきめ細かな支援をするために、それぞれの学習過程に応じて評価規準を作成し（資料１）、つまずきに対する具体的な支援を用意しておくことが必要である。

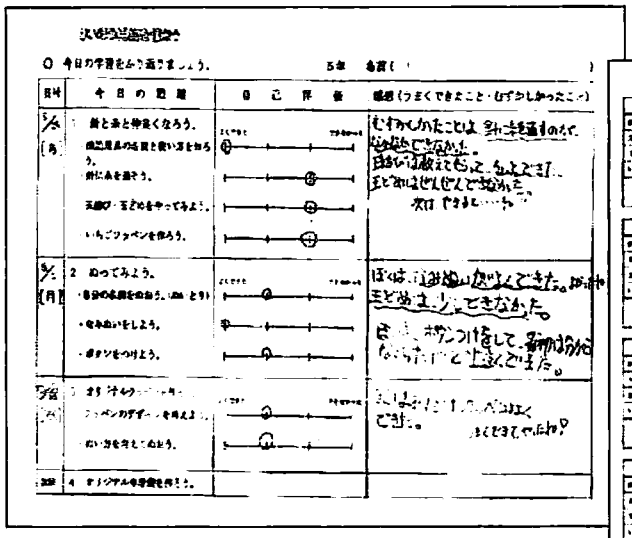
個々の学習状況を的確に判断するため、毎時間、振り返りカード（資料２）を記入させた。振り返りカードは、その題材を通して身に付けさせたい基礎・基本を示し、その基礎・基本の一つ一つの項目について４段階で自己評価を行えるように工夫した。また、感想を書く欄を設け、困ったことや自分なりの工夫・がんばりを書き込めるようにした。この自己評価を児童チェックリスト（資料３）にまとめ、評価の低かった児童を次の時間に重点的に支援するとともに、スクールボランティアへ支援のお願いをした。

資料１　「さいほう用具を使おう」指導計画及び評価規準

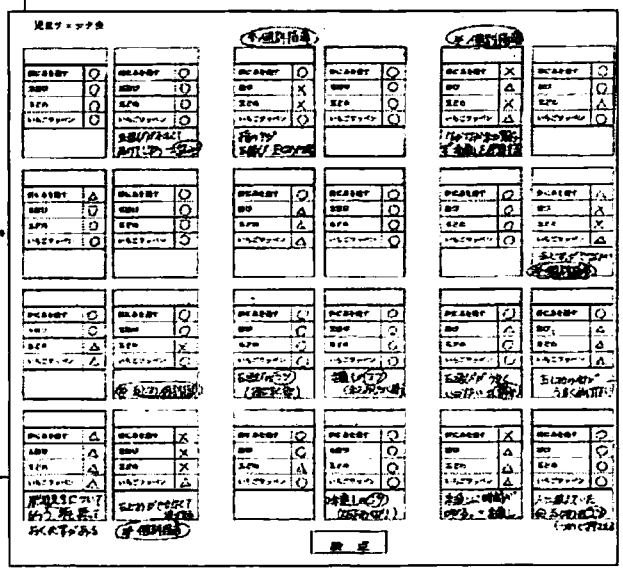
学習活動・学習内容	具体の評価規準（方法）
1　針と糸と仲良くなろう② ・裁縫用具の名前と使い方を知る。 ・針に糸を通してみる。 ・玉結びや玉どめの必要性に気付き、その方法を知る。 ・玉結び、玉どめを繰り返して、いちごワッペンを作成する。	関心・意欲・態度（発言・活動の姿・カードへの記述） 進んで針に糸を通したり、玉結びに挑戦したりしている。 技　能（製作したいちごワッペン） 玉結び・玉どめができる。

2　縫ってみよう② ・自分の名前を縫う。 ・なみ縫いの仕方を理解する。 ・ボタンの付け方がわかり、ボタンを付ける。	関心・意欲・態度（発言・活動の姿） 自分の名前を進んで縫おうとしている。 技　能（カードへの記述・縫った模様・つけたボタン） 縫い目の大きさに気を付けてなみ縫いができる。 ボタン付けができる。 知識・理解（発言・カードへの記述） なみ縫いの仕方やボタンの役割、ボタンの付け方が分かる。
3　オリジナルワッペンを作ろう② ・ワッペンのデザインを考える。 ・自分の考えた模様に合わせて、縫い方を考えて縫う。	創意工夫（カードへの記述・縫った模様） 自分の考えた模様に合わせて、なみ縫いや返し縫いなどの縫い方を工夫している。 技　能（製作したワッペン） 模様に合わせていろいろな縫い方でワッペンを製作することができる。
4　オリジナルきんちゃく袋を作ろう⑤ ・きんちゃく袋のデザインを考える。 ・なみ縫いやボタン付けをして模様を作る。 ・返し縫いの仕方を知り、袋の口と脇を縫う。	創意工夫（カードへの記述・縫った模様） 袋の模様を考えた縫い方を工夫している。 技　能（製作した袋） 袋の部位により、目的に応じた縫い方ができる。 知識・理解（活動の姿・カードへの記述） 簡単な縫い方を理解している。 製作に必要な用具の安全な取り扱い方を理解している。
5　オリジナルきんちゃく袋発表会をしよう① ・友達に作った袋を紹介しよう。	関心・意欲・態度（発言・カードへの記述） 友達の作品のよさを認め、これからの製作に生かそうとしている。

資料２　児童用振り返りカード



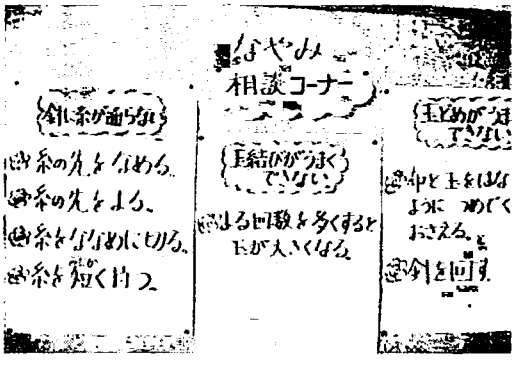
資料３　児童チェックリスト



③　学び合いの重視

製作においては、一人一人が製作の課題をもち活動していくので、個々に学んだ内容について互いに情報交換していく場が必要である。「糸がなかなか通らないとき、どうしたらうまく通せるの？」、「すぐに針から糸が抜けてしまうんだけど。」などの悩みに対して、「こうしたらうまくいったよ！」という試行錯誤する中で身に付けた知識や技能を情報交換することは、互いの知識や技能を高める上でとても大切である。

そこで、授業の始めに前時の振り返りカードの感想などから、子どもたちが抱えている悩みや問題を紹介し、全体で話し合う時間を取るようにした。そこで出された解決方法やこつは、画用紙にまとめ、いつでも見られるように掲示した。（資料４）ここで出たこつが、次の活動の関心や意欲を高めることにつながり、「やってみよう」、「やってみたらうまくいった」という感想が多く聞かれた。



資料４　悩み相談コーナー

４　成果と今後の課題

○　簡単なものから難しいものへ、少しずつ発展させながら小物の製作を行う題材構成をした結果、子どもたちは、楽しみながら意欲的に学習に取り組むことができた。何度も繰り返し学習することで、基礎的・基本的な技能を確実に高めることができた。初めは針に糸も通せなかった子どもたちの進歩には、目を見張る思いだった。また、作品を作り上げた満足感から、「もっと作りたい。」と、家庭でワッペンやティッシュケース、小さいカバン等を製作するなど、実践意欲の高まりが見られた。

○　評価計画を作成し、多様な評価方法を用いて個々の学習を評価することで、子どもたちの学習状況に応じて支援していくことができた。特に、振り返りカードによる自己評価は、授業中に行う教師の評価ではつかみきれない子どもの実態を把握するのに役立った。また、そこで身に付けさせたい基礎・基本を評価項目にすることで、次時においてどの子どもへどのような支援をすればよいのかを考える上で大変役に立った。

○　「悩み相談」という形で友達との学び合いの場を設定したことで、互いのよさを認め合い、共に学び楽しさを実感しながら、基礎的な技能を身に付けていくことができた。

○　同じ学習内容に対しても子どもたちの経験の差・能力の差はとても大きい。その一人一人に細かな支援を行う上で、スクールボランティアの存在がとても大きかった。技術面での支援とともに励ましの言葉が子どもたちの学習への意欲付けにつながった。

○　今後は、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けることができるように、子どもの実態に即し、さらに興味・関心を高める題材の開発や題材構成の工夫に努めていきたい。また、家庭との連携を図り、児童が身に付けた知識や技能などを活用できるようにしていきたい。

○　評価については、学習前に評価計画をきちんと立て、一つの評価に頼るのではなく、自己評価や相互評価などいろいろな評価方法を組み合わせ、より個に応じた支援を可能にしていきたい。